

動詞の自他の習得—日本語学習者の自然発話の分析—
 ACQUISITION OF VERB TRANSITIVITY:
 ANALYSIS OF SPONTANEOUS PRODUCTION IN LEARNERS OF JAPANESE

加山裕子, マニトバ大学
 Yuhko Kayama, University of Manitoba

1. はじめに

伊藤 (1990) によると、第一言語習得において日本語を母語とする子供は、まず自動詞を習得してから使役語幹の使用を経て、他動詞の習得にいたるといふ。伊藤は初期の自動詞の多用を子供の自己中心性によるものとしているが、Nomura & Shirai (1997) は自然発話で幼児が自動詞を多用するのを確認しながらも、それが実際に自己中心性に起因するのか、第二言語学習者のデータを観察すべきであると提言している。第一言語習得との比較という点で、学習者の自・他動詞の習得は関心の的になるが、それ以前に日本語学習者の自動詞・他動詞の習得には困難が付きまとうという問題は、調査の対象として日本語教育関係者には興味深いトピックと言えよう。殊に英語を母語とする学習者にとって、同じ動詞が自動詞・他動詞として共用できる英語の動詞 (*break, stop, etc.*) の用法が日本語の動詞には通じないからである。初級日本語の教科書、例えば北米の大学に普及している「げんき」(Banno, Ikeda, Ohno, Shinagawa, & Tokashiki, 2011) では、10対の自動詞・他動詞のペア(あく・あける等)が紹介される。学習者はそれらを暗記することで用法を学ぶのであるが、語幹の類似やルール性の不明瞭さにより、これらの動詞を自発的かつ生産的に発話できるようになるのは決して容易ではないと言える。

この研究では、日本語学習者の自動詞・他動詞の使用と習得の状況を、自然発話を観察することによって調査する。

2. 背景と先行研究

日本語には、同じ語幹から派生して自動詞・他動詞になる例が比較的多い。Jacobsen (1992) は日本語の自動詞・他動詞のペア(あく・あける等)をリストにし、自動詞・他動詞化形式素による15種類余りの規則を記した。それらの規則は極めて複雑で、自動詞化形式素が他の規則では他動詞化形式素となっている場合(i.e. *sak-e-ru/saku, aku/ak-e-ru*)さえある。つまり、Jacobsen がリスト化した規則に従って自動詞・他動詞の派生を体系的・理論的に学ぶことは難しいのである。それゆえ、上に記したように学習者はこれらの規則とは関係なく、教科書に列挙された自動詞・他動詞のペアを学ぶことになっている。

自動詞・他動詞という動詞の区別の他に、自動詞には二種類の区分があるという。Perlmutter (1978)・Burzio (1986) らは反対格仮説(Unaccusative Hypothesis)によって、自動詞はさらに非能格動詞と非対格動詞の二つに分類されると提唱した。この仮説によると、この二種類の動詞の違いは前者は表層の主語がD構造においても主語の位置に生成されるが、後者は表層の主語がD構造

では目的語の位置に生成され主語の位置は空になっているということである。英語の例を以下に示す。

- 例 1) a. 非能格動詞：John [VP ran] ('John ran.')
- b. 非対格動詞：_____ [VP broke [NP the glass]] ('The glass broke.')

非対格動詞では、D 構造の目的語は表層で主語の位置に移動するため、目的語に対して格を与えず主語に対して意味役割を与えないという性質を持つ。非能格・非対格動詞の両者は統語的・意味的に違うふるまいを見せ、それは言語によって様々である。意味的な特質に関して言えば、非能格動詞の主語は一般的に「動作主 (Agent)」の意味役割を持ち、非対格動詞の主語は「主題 (Theme)」の意味役割を持つ。非対格動詞は統語的には一貫して (1b) に見られるような D 構造をしているが、意味的には複数のグループに分類できると言われる。

非対格動詞の第二言語習得は様々な第一言語・第二言語の組み合わせで研究されているが、多くの第二言語で習得が困難と言われている (英語：Hirakawa, 1995, Zobl, 1989; イタリア語・フランス語：Solace, 1993a, 1993b; 中国語：Yuan, 1999)。

Hirakawa (1999, 2001) は、英語を母語とした中級・上級の日本語学習者が非能格動詞と非対格動詞の統語的・意味的な特性に反応を示すかどうかを調査するため、「たくさん」と「～ている」を使用した試験文を用いて文法性診断テストを行った。副詞の「たくさん」は動詞の内項 (internal argument) のみを修飾するとされ (影山 1993)、非能格動詞の文で「たくさん」が使われた場合、動作主がその動作を多く行った (「たくさん泳いだ」＝一人が長い距離を泳いだ。多くの人が泳いだ、ではなく) と解釈されるが、非対格動詞の文では表層の主語 (D 構造の目的語) が「たくさん」を受け、多くのものが同じ状況を経験する (「たくさん着いた」＝多くの人が着いた) と解釈されるのである。一方、非能格動詞が「～ている」の形をとった場合、動作の進行を表すのに対し、非対格動詞は一般的に「～ている」の形で結果を表す。被験者はそれらの文が与えられた絵の描写と合致しているかどうかの真偽判断をするように指示された。結果として「～ている」を使った試験文では、大部分の被験者が非能格動詞には動作の進行の解釈をし、非対格動詞には結果の解釈をしたため、Hirakawa は学習者が二つの自動詞グループの違いを大概理解していると報告した。しかし、「たくさん」を使った試験文では中級学習者が非能格動詞と非対格動詞の文に正しい絵を選ぶことができたのに対し、上級学習者の多くは非能格・非対格動詞の解釈に大きな差を示さず、二つの自動詞グループの区別が確立されていないらしいことが見受けられた。Hirakawa はこの結果について、上級学習者の被験者には副詞「たくさん」の統語的用法が誤って理解されているのではないかと論じたが、この上級学習者の結果は、非能格・非対格動詞の統語的・意味的用法の複雑さ・習得の困難さを裏打ちするとは言えないだろうか。

一方、Sorace & Shomura (2001) は、英語を母語とする学習者を教室のみで日本語を学習したグループ (初級上) と日本に 9 ヶ月間滞在したグループ (中級)

に分けて、非能格・非対格動詞の習得を可否判定を用いて調査した。試験文に使われたのは数詞の移動である。数詞は、非能格動詞の文では修飾する名詞と隣接してはならないという制限があるが、非対格動詞の文では数詞が移動し修飾する名詞と隣接してはなくても非文にはならない。試験の結果、日本に滞在したグループは、非能格動詞では数詞が移動している文と数詞と名詞が隣接している文の可否判断に差が見られ、日本での滞在経験がないグループよりも非能格動詞の習得が進んでいるようであった。しかし非対格動詞に対しては、どちらのグループも不規則なパターンを示していた。Sorace & Shomura は、この結果が非能格動詞と非対格動詞の違いを明らかにしたとし、初～中級学習者においては非能格動詞の知識は非対格動詞のそれよりも先に習得されると結論付けた。

これらの研究は日本語学習者の理解力を調査したものだが、日本語学習者の発話に基づいた自動詞・他動詞習得の研究は少ない。言語習得においては発話能力よりも理解力が先に発達するわけだが、自動詞の習得に関して Hirakawa (1999, 2001) や Sorace & Shomura (2001) で報告されたような非能格・非対格動詞の差が発話のレベルで見られるのかどうか、本研究では日本語学習者の自然発話を用いて調査・分析を行うことにした。

3. 自動詞の分類

本研究に入る前に、非能格動詞と非対格動詞の区別について解説する。

Perlmutter (1978) は非能格動詞は動作・意思に基づいた活動を表し、非対格動詞はものごとの始まりや終わり・存在・継続的な状態などを表すと同時に動詞の意味役割が「非動作主 Patient」になるものなどとした。しかし、意味的な要素と統語的なふるまいが必ずしも一致しない場合も多く、非能格と非対格の区別が難しい自動詞もあると言われる。しかも多くの言語において、一貫して非能格と非対格両方の性質を表す自動詞もあるという。そのため、意味的な要素によっていかに非能格・非対格動詞を統語的に捕らえるかが様々な研究で取り上げられているわけである。

Sorace (1993a) は非能格動詞と非対格動詞は全く別々のグループに分類されるのではなく、その違いは段階的に推移するものとして、非能格から非対格へ移行する階層図 (Split Intransitivity Hierarchy) を提示し、動詞の限界性 (telicity) という点に注目して自動詞を分類した。この図において、一方の端には非能格動詞の代表的な特徴である「コントロールできる非動作・過程」があり、別の端には非対格動詞の特徴である「場所の変化」が記され、その間には動詞の限界性に基づいてどちらかの側により近い意味的特質が記されている。Sorace & Shomura (2001) では、この階層図を日本語に応用して日本語学習者を対象とした試験文を作った。本研究での非能格・非対格動詞の判定は、Sorace & Shomura に記載されたリストに準じて行った。以下に二つの自動詞グループの意味的な特質を挙げる。() 内は日本語の動詞の例である。

例2) 非能格動詞：動作主のいる非動作の過程 (うたう) ・動作主のいる動作の過程 (あるく) ・動作主のいない過程 (ゆれる) など

非対格動詞：場所の変化（くる）・状況の変化（あがる）・状況の継続（つづく）・存在の状況（いる）など

4. 本研究

4.1 研究課題

本研究では、日本語学習者の自然発話において自動詞・他動詞がどのように使用されているのか、その傾向を調査する。特に自動詞の中で非能格動詞と非対格動詞の分類を行い、その頻度・種類によって分析を試みる。

4.2 被験者とデータ収集

被験者は、カナダの大学に在学し日本語を学習する者4名であった。そのうち、2名は日本に1年間留学した経験があり、他の2名は大学で日本語を履修した他には日本に滞在した経験はなかった。前者の被験者の母国語はフィリピン語（被験者1）と英語（被験者2）、後者の被験者の母国語は英語（被験者3）とフィリピン語（被験者4）であった。日本語学習期間は、被験者1が4年間、他の3名が約3年間であった。この研究の便宜上、被験者1と2を「上級学習者」、被験者3と4を「中級学習者」と呼ぶことにする。また、日本語母語話者1名をコントロールとして同様に調査した。

データの収集は、被験者の自然発話の録音によるものである。被験者は研究者の研究室に来て自分の好きなことについて日本語で自由に話すように指示された。取り上げられた話題は旅行・趣味・勉強・将来など、被験者それぞれが複数のトピックについて話した。録音の間、研究者は会話が続くように質問をする他は、あいづちを打つなどして聞き役にまわり、被験者の発話をなるべく多く収集できるように注意を払った。会話のセッションは被験者の負担を考慮して2回に分けられ、各被験者合計30分間の自然発話データを得た。録音後、音声データはJCHAT（MacWhinney, 2000; Oshima-Takane, MacWhinney, Sirai, Miyata, & Naka, 1998）を使って文字化され、さらに発話された動詞がコードされた。以下にコーディングについて詳しく述べる。

4.3 コーディング

発話された動詞は動詞の原形でコードされ、自動詞・他動詞に分類された。ここでの自動詞・他動詞の区別は、基本的に目的格（「を」格）を伴う可能性があるか否かに基づいて判断した。Kuno（1973）や寺村（1982）で指摘されるように移動の範囲を表すのに「を」が使われた場合（「道を歩く」）は、他動詞ではなく自動詞としてコードした。さらに Jacobsen（1992）の自動詞・他動詞ペアのリストに準じて、ペアになる動詞か否かがコードされた。なお、以下の場合はコードから除外された。

コピュラ動詞

「なる」、あるいは「形容詞+なる」

「形容詞+すぎる」

できる

補助動詞（～ている、～てみる、～てもらおう等）
 構文で使われる「する」（～たりする、～ようにする等）
 そのほか慣用表現内の動詞（～という、どうやって、～として等）
 言い間違い
 言い直された発話
 自己の発話の繰り返し
 被験者が研究者の言ったことを繰り返した場合

5. 結果と考察

5.1 自動詞と他動詞の発話

表1はコードされた動詞全体を自動詞・他動詞に分類したものである。

表1 発話された自動詞と他動詞（タイプとトークン）

被験者		1	2	3	4	母語話者
自動詞	タイプ	35	27	19	20	63
	トークン	124	134	60	61	220
他動詞	タイプ	29	31	25	31	55
	トークン	109	83	96	98	179
計	タイプ	64	58	44	51	118
	トークン	233	217	156	159	399

コードされた動詞をすべて考慮した場合、上級学習者（被験者1と2）と中級学習者（被験者3と4）の間にいくつかの違いが見られた。中級学習者はタイプ・トークンとも自動詞よりも他動詞を多く発話しているのに対して、上級学習者はトークンで他動詞よりも自動詞をより多く発話している。タイプに関しては被験者1のみが他動詞をやや多く発話していた。上級・中級両者の他動詞の発話数を比べると二つのグループにあまり大きな差がないが、自動詞ではタイプ・トークンとも上級学習者の発話数が多い。自動詞の数が他動詞を上回る傾向は母語話者にも見られた。

表1の動詞の中から、自動詞・他動詞でペアになる動詞（あく／あける等）を分類したものが以下の表2である。

表2 ペアになる自動詞・他動詞（タイプとトークン）

被験者		1	2	3	4	母語話者
自動詞	タイプ	13	9	5	4	22
	トークン	24	21	6	5	39
他動詞	タイプ	6	3	5	6	11
	トークン	22	3	21	15	26

中級学習者の自動詞・他動詞のトークンでは、他動詞のほうが自動詞よりも頻度が高いが見られるが、タイプだけを見ると自動詞も他動詞もほぼ同じ数になっ

ている。これに対して上級学習者は、タイプでは他動詞よりも自動詞がより多く使われている傾向が明らかに見られ、さらに中級学習者に比べても自動詞がより多く発話されていた。そして母語話者も、自動詞の使用のほうが他動詞よりも多いという傾向を示していた。

表2で発話された自動詞を個々に詳しく調べてみると、中級学習者と上級学習者の間の違いがより鮮明になってくる。上級学習者の自動詞は、タイプ（種類）が多いだけでなく、無生物が主語となる自動詞がより多く使われている（あく、きまる、おわる、など3~6タイプ）のである。これに対して、中級学習者の二人とも、無生物が主語となる自動詞はそれぞれ1タイプしか発話していなかった。

上の結果を検討すると、ペアになる動詞もそうでない動詞も自動詞の発達が第二言語としての日本語の習得に深く関わっているらしいことがうかがえる。そこで、被験者に使用された自動詞をさらに別の観点から、すなわち非対格・非能格動詞に分けて調査してみることにした。

5.2 非能格動詞と非対格動詞の発話

表1で報告した自動詞を（例2）に挙げた区分に基づいて非能格動詞と非対格動詞に分類した。その際、分類が難しいものに関しては、畠山（2008）に記載されたテストのいくつかを用いて動詞の限界性を判定し、限界動詞と考えられるものを非対格動詞として分類した。また単独で自動詞として発話された「する・やる」は、他の動詞を置き換えている場合があり、動詞の解釈によって判定が異なってしまう可能性があるため、この分類からは除外した。表3は、学習者と母語話者が発話した非能格動詞と非対格動詞の数（タイプとトークン）を表したものである。

表3 発話された非能格動詞と非対格動詞（タイプとトークン）

被験者		1	2	3	4	母語話者
非能格	タイプ	9	8	7	7	14
	トークン	12	15	9	11	24
非対格	タイプ	25	19	12	12	47
	トークン	105	118	51	48	186

まず母語話者の結果を見ると、自然発話において非対格動詞のほうが非能格動詞よりも多く使われることがわかる。この研究に参加した母語話者に関しては、非対格動詞は非能格動詞の3倍以上の種類（タイプ数）が使われていた。この傾向は、学習者全員にも同様に見られた。中級学習者では、非能格動詞と非対格動詞の差があまり見られなかったが、上級学習者では非能格動詞と非対格動詞の発話の割合が母語話者に近いことがわかった。二つの学習者グループを比較すると、興味深いことに非能格動詞のタイプ数にはほとんど差がないにもかかわらず、非対格動詞のタイプ数では大きな違いがあることがわかる。つまり、日本語の習得が進むにつれてより多くの非対格動詞が習得され使用されるらしいことを示し、これは Sorace & Shomura（2001）の結果とも一致する。

下の表は、表3に示された学習者の非対格動詞を意味的特質ごとに頻度順に記したものである。()内はトークン数を表す。

表4 発話された非対格動詞

被験者	1	2	3	4
場所の変化	いく(15) はいる(8) くる(6) 帰る(2) ひっこす(2) でる(1)	いく(42) はいる でる(1) くる(1) 帰国する(1) ひっこす(1)	いく(7) くる(1) はいる(1)	いく(15) くる(1) 帰る(1)
状況の変化 (方向づけられ た動き・状態の 変化・発生)	<u>わかる(3)</u> しりあう(2) おきる(2) なれる(2) <u>おわる(2)</u> <u>まざる(1)</u> <u>われる(1)</u> 似る(1) <u>あがる(1)</u> <u>きまる(1)</u> 申し込む(1) 出会う(1) ひきこもる(1) うまれる(1) <u>経つ(1)</u> <u>きこえる(1)</u>	<u>こむ(4)</u> <u>あく(2)</u> <u>あたる(1)</u> 似る(1) ぶつかる(1) 乗る(1) たすかる(1) <u>つながる(1)</u> うまれる(1)	<u>わかる(3)</u> 乗る(1) <u>きまる(1)</u> ねる(1) しぬ(1)	<u>わかる(3)</u> いなくなる(2) すわる(1) 住み始める(1) はまる(1) なれる(1)
存在の状況 (抽象的状态 ・心理状態)	ある(34) いる(14) ちがう(1)	ある(33) いる(10) ちがう(4) びっくりする(1)	ある(32) いる(1) 心配する(1) ちがう(1)	ある(14) いる(7) びっくりする(1)

上の表によると、上級学習者と中級学習者の発話した非対格動詞の差は、「場所の変化」と「状況の変化」を表す動詞に見ることができる。特に「状況の変化」の意味的特質では、上級学習者のほうがより多く動詞を発話していた。表2の結果では無生物が主語となる自動詞が上級学習者により多く使われていたことが明らかになったが、表4の「状況の変化」を表す動詞に注目すると、上級学習者では主語が無生物になる動詞(下線部のもの)は生物が主語となる動詞とタイプ数ではほぼ同じで、生物・無生物が主語となる動詞の使用にそれほど大きな違いは

ないように見える。しかし、中級学習者が発話した非対格動詞全体を見ると、無生物が主語になる動詞が非常に限られていることがわかる。つまり、学習者には人が主語になりうる非対格動詞に比べ、物が主語になる非対格動詞の習得にやや時間を要すると言えるのではないだろうか。上の結果を考慮すると、自動詞の中では非能格動詞のほうがより習得されやすいだろうということが予測される。基本的に、非能格動詞は動作主の意図的な動作・行動を表し、人が主語になりうる動詞が多いのである。学習者にとって、そうした動詞のほうが日本語での発話に使いやすく、習得しやすいのは当然と言えるであろう。

一般的に日本語に比べ英語には無生物を主語にした構文が多いにも関わらず、本研究の結果を見ても日本語習得において英語を母語とする学習者が、無生物が主語になりやすい非対格動詞の習得に関して特に有利な立場にあるとは言えない。この点での英語と日本語の違いは、英語の無生物主語は他動詞と共に現れるのに対し、日本語では基本的に述語動詞が自動詞の場合に無生物主語が可能であることである。上のデータから例を挙げると「きまる」など無生物を取る自動詞は、英語では主に人を主語にとる他動詞であって、物を主語にする場合は受身文にしなくてはならない。こうした言語間の表現方法の違いも日本語の非対格動詞の習得の難しさに関わっていると言えるかもしれない。

6. まとめ・おわりに

本研究では、4名の日本語学習者の自然発話を観察・分析し、発話の中で自動詞と他動詞がどのように使用されているのか、その傾向を調査した。日本に滞在した経験のない「中級学習者」では自動詞よりも他動詞の使用が多くみられた一方、日本に一年間滞在した経験のある「上級学習者」では、母語話者に近い、他動詞よりも自動詞をやや多く発話する傾向が見られた。これは、前述のNomura & Shirai (1997) の動詞の第一言語習得のデータと比べても興味深い結果と言える。発話された動詞を分析した結果、他動詞の使用には中級学習者と上級学習者の間に数の上で大きな違いは見られなかったが、自動詞の使用においては、上級学習者のほうが多くの種類の自動詞、特に非対格動詞をより頻繁に使用していることが明らかになった。

語彙力の発達という観点から言えば、上級学習者や日本に滞在した経験がある学習者がそうでない学習者に比べて単語を多数習得しているのは当然なのだが、興味深いのは本研究のデータ分析によって発達の要となる部分が自動詞、しかも非対格動詞にあるらしいということが浮き彫りになって見えてきたところである。つまり、中級学習者と上級学習者の間で差が見られた非対格動詞は、差が見られなかった他動詞や非能格動詞に比べて習得がより困難であり、学習者の言語発達の過程でゆっくりと習得されていくらしいということがわかる。これは、他の研究でも論じられている非対格動詞の統語的構造や意味的特質の複雑さが影響していると言える。また上で述べたように、日本語の非対格動詞は無生物が主語になる動詞が多く、他言語においてそれに対して必ずしも一対一の関係を持った表現方法があるわけではないことも習得の難しさの原因の一つであろう。

学習者は自動詞・他動詞の違いは習っても、非能格動詞・非対格動詞の違いについて教室で体系的に指導を受けることはほとんどない。しかし、日本語学のコ

ースなどで非能格・非対格動詞の様々な意味的特質について明示的に指導することで、ある程度の理解や習得を促す効果が期待できるであろう。さらには、無生物主語に焦点を置いた動詞の指導や練習などを活用することで、非対格動詞の習得が進むのではないかと考えられる。

本研究は被験者が4人と小規模なデータに基づいたものであったが、今後の研究課題として、より多くの被験者のデータを検討することが必要であると言える。発話データ収集のため、被験者は日本語が比較的流暢に話せる言語運用レベルの中級～上級学習者にせざるをえなかった。非能格・非対格動詞の理解力を調査したSorace & Shomura (2001) ではそれよりも下のレベルの学習者も含めて対象にしている。初級～中級学習者の発話データも何らかの方法によって収集できれば、自動詞・他動詞の習得に関してより興味深い分析ができるかもしれない。また、日本語の第一言語習得でもまだ研究はされていないが、自動詞・他動詞化形式素を用いて学習者が自動詞・他動詞の習得ができるのかどうかという調査もする価値があるだろう。さらに、今回のデータは学習者の自発的な発話を観察・記録したものであったが、学習者が習得し理解している動詞であっても限られた時間内の発話に現れたとは必ずしも言い切れない。学習者の非能格・非対格動詞の知識をいっそう詳しく検証するために、誘導発話や文生成テストなどを用いてより緻密な分析をするべきである。

参考文献

- 伊藤克敏 (1990) 『こどものことば—習得と創造』 勁草書房
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味—第1巻』 くろしお出版
- 畠山真一 (2008) 動詞の限界性を判定するテストセット『尚絅学園研究紀 A. 人文科学編』 第2号 27-40
- Banno, Eri, Yoko Ikeda, Yutaka Ohno, Chikako Shinagawa, & Kyoko Tokashiki. (2011). *Genki II: An Integrated Course in Elementary Japanese. Second Edition.* Tokyo: Japan Times.
- Burzio, Luigi. (1986). *Italian Syntax: A Government-Binding Approach.* Dordrecht: Reidel.
- Hirakawa, Makiko. (1995). L2 Acquisition of English unaccusative constructions. In D. MacLaughlin & S. McEwan (Eds.), *Proceedings of the 19th Annual Boston University Conference on Language Development*, 291-302. Somerville, MA: Cascadian Press.
- . (1999). L2 acquisition of Japanese unaccusative verbs by speakers of English and Chinese. In K. Kanno (Ed.), *The Acquisition of Japanese as a Second Language*, 89-113. Amsterdam: John Benjamins.
- . (2001). L2 acquisition of Japanese unaccusative verbs. *Studies in Second Language Acquisition* 23, 221-245.
- Jacobsen, Wesley M. (1992). *The Transitive Structure of Events in Japanese.* Tokyo: Kuroshio.
- Kuno, Susumu. (1973). *The Structure of the Japanese Language.* Cambridge, MA: MIT Press.

- MacWhinney, Brian. (2000). *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*. Third Edition. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Nomura, Masami, & Shirai, Yasuhiro. (1997). Overextension of Intransitive verbs in the acquisition of Japanese. In E. V. Clark (Ed.), *Proceedings of the 28th Annual Child Language Research Forum*, 233-242. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Oshima-Takane, Yuriko, Brian MacWhinney, Hidetosi Sirai, Susanne Miyata, & Norio Naka (Eds.). 1998. *CHILDES for Japanese*. Second Edition. The JCHAT Project. Nagoya: Chukyo University.
- Perlmutter, David. (1978). Impersonal passive and the unaccusative hypothesis. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 38, 157-189.
- Sorace, Antonella. (1993a). Incomplete vs. divergent representations of unaccusativity in non-native grammars of Italian. *Second Language Research* 9, 22-47.
- . (1993b). Unaccusativity and auxiliary choice in non-native grammars of Italian and French: Asymmetries and predictable indeterminacy. *French Language Studies* 3, 71-93.
- Sorace, Antonella, & Shomura, Yoko. (2001). Lexical constraints on the acquisition of split intransitivity: Evidence from L2 Japanese. *Studies in Second Language Acquisition* 23, 247-278.
- Yuan, Boping. (1999). Acquiring the unaccusative/unergative distinction in a second language: Evidence from English-speaking learners of L2 Chinese. *Linguistics* 37, 275-296.
- Zobl, Helmut. (1989). Canonical typological structures and ergativity in English L2 acquisition. In S. Gass & J. Schachter (Eds.), *Linguistic Perspectives on Second Language Acquisition*, 203-221. New York: Cambridge University Press.